
交響義戦シンフォニックス・ブレイブ

白蜜印のメイド漬け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交響義戦シンフォニックス・ブレイブ

【Nコード】

N7225Y

【作者名】

白蜜印のメイド漬け

【あらすじ】

かつて、この世界では神人戦争と呼ばれる強大な存在との戦いがあった。そんな世界崩壊の危機を救ったのは、一人の歌姫だった。歌姫の存在により世界は再生の一途を辿り 現代に至る。時は半世紀経ち、神歌町に住む高校生ノ京橋零時は、入学式の帰りに、海で溺れる少女と出会う。この巡り合わせが 私、クウネル「エクスウェルは、あなた達が歌姫と呼ぶ存在。京橋零時、あなたは私の契約者となってもらい、第二次神人戦争を戦ってもらいます 彼の運命を変える。

1st GEAR『全てが終わる』

これで全てが終わる。

少女は思った。

憔悴した瞳に映るは、荒れ狂う波。岩壁に打たれ、返され、飛沫を撒き散らしている。

高さや波の激しさから見ても、到底、人が飛び込めるような状態ではなかった。

しかし。

少女は海へと飛び込んだ。

何の躊躇いもなく、何の希望も持たず。

ただ絶望のみを抱えて、荒れ狂う波の中に身を投じた。

一縷の光さえ届かない深海の底へ沈んでいけば、それでよかった。それで。

全てが終わるのだから。

2nd GEAR『全てが始まる』

京橋零時はその日、晴れて高校生となった。

巷では高校デビューなどと煽るほど、高校入学に期待を寄せる者が多いが、零時は期待がまったくなかった。

別に高校に入学したい気もなく、ただ、周囲の人間の意見を受け入れていたら、いつの間にか入学していたに過ぎない。

だから、別に入学した高校にもこだわりはなく、至って普通の県立高校に入っていた。

入学までの春休みは、クラスを共にしてきた仲間が、行き先が別々になるからといい、パーティーを開いていた。

零時も周囲に流されて参加はしたが、大した印象は残らなかった。楽しいとも、つまらないとも思わなかった。

唯一、印象に残ったエピソードを挙げるとなれば、同じ運動部のマネージャーから告白されたことくらいだ。

これが初めてではなく、これまでも何度か告白されたことがある。意外にも零時は同年代の女性からの人気が高く、ルックスだけで見れば、確かに平均値より上は行っている。

性格に関しても、決して欠陥があるわけではなく、普通に友達とも喋るし、声がかかれば、女子と遊んだりもする。

周囲の意見を受け入れる性格が功を奏し、女子が持つ重い荷物を運んであげたりもする。

そんな一面が、女子の評価を上げたのだろう。

しかし、だからといって、率先して付き合う気にはならず、そこは本人にしかわからないラインが存在するようだ。

これから先、また同じ似たような日々を繰り返すと思うと、とても疲れる。

高校生活に期待はしていない。

今まで多少なりと支えにしていた友人との付き合いも、こんな田

舎町では期待を持てと言う方が無理だ。

神歌町。
しんかまち

人口僅か300人の、小さな島の小さな町だ。

神の国 旧名“日本”の最南端に位置するこの場所は、かつて戦争があつた。

未確認生命体、宇宙人、未来人など 呼び名は様々だが、最終的に付けられた名は、神人。しんじん 神の人。その成りが人と全く同じだったことから、そう名付けられた。

神人は知能はあるようだが、言葉は喋れず。生き残るためには、戦闘以外何もなかった。

だが、神人は人間を遥かに凌駕する高さを持っていて、その上、当時の科学では解明できない未知の力を使っていたため、人間が太刀打ちする術はなかった。

そのせいで、人類の総人口は急激に減少し、一時は世界崩壊説まで流れた。

現に何百何十もの国は滅び、日本も危機ではあつた。

しかし、それら危機は、やがて終わりを迎えることとなる。

たった一人の救世主。歌姫によって。

何一つ、太刀打ちする術のなかった人間達だったが、たった一人の救世主の歌が、全ての危機から救った。

神人は消え、滅びた国や人々は再び息を吹き返し。

世界は、再生へと進んでいった。

神人戦争終結以来、日本は神の国と名付けられ、歌姫が現れたこの町は『神歌町』と呼ばれるようになった。

今や歌姫の行方は誰も知らず、存在を疑問視する者もいれば、ただ奇跡と崇める者もいる。

いずれにせよ、今を平和に生きることができるのは、救世主の歌のおかげだ。

「 第五級巡視警戒中。本日、異常はありません」

空を回るあの巡視飛行船は、神人戦争終結以来、ずっと回ってい

る。

第五級は、異常無し。四、三と階級を上げていくにつれて、状況が変わる。

もつとも、神人戦争終結後は、第五級しか報告されていないが。人々は巡視飛行船は経費の無駄だと言うが、零時はそうは思わない。

この町で唯一、あの巡視飛行船を飛んでいる姿を見るのが、好きだからだ。

よくよく考えれば、この高校の登下校だけは、楽しいかもしれな

い。
毎日、あの巡視飛行船が真下から眺められるのだから。
バシャン！

「！」
波の音……とは少し違う音に、零時は反応した。

ガードレールから、崖の下を覗いてみる。

雑草の生えたその先、波。そこで、溺れている少女を見つけた。

「大丈夫」
夫なわけがない。

どうする。

周囲に人間はいない。意見はもらえない。

誰か助けを呼ぶか。いや、間に合わない。間に合うはずがない。

「」
放つてはおけない……よな。

「……ッ」
高さは十メートル。下手したら死ぬ。

でも、誰も助けてはくれない。

「俺が行くしかないだろ！」

バッグを投げ捨てて、ガードレールを飛び込めて、零時は走った。
荒れ狂う海の中に、少女を救う為に身を投じた。

自分の意志で。

*

「……はあ、はあ」

今日の自分を昨日の自分が見たら、何と思うだろうか。

泳ぎが得意だったことが幸いし、何とか少女を救うことができた。とはいえ、二人は崖の窪みにいるため、とりあえず救ったに過ぎない。

誰かに連絡できればいいのだが、助けることに夢中で、ズボンにケータイを入れっぱなしにしたまま、海に潜ってしまった。当然、もう使えない。

「……どうするかな」

俺だけでも崖を登って、助けを呼んでくるか。

いや、そしたらたぶん、またこの子は　。

「……………」

水に濡れた白いワンピースは、まじまじと見ていい姿ではなかった。

零時は着ていた乾かしていた上着を取り、少女に被せた。
改めて、見る。

年は、たぶん十五歳前後。中学生くらいか。
見たところ、手首に傷などは見当たらない。

それにしても、手足が細い。肌も色白だし、まるで人間が生まれ変わった天使のようだ。

ピンクの髪は地毛なのか。零時は軽く触れてみた。

「……んっ」

吐息のような少女の声に、零時はとつさに髪を触れる手を引いた。

「大丈夫？」

「……あなたは？」

「京橋零時。学生」

「京橋さん…… すみません。私の勝手に巻き込んでしまつて」

「いいよ。助けたのは俺の勝手だから」

「優しい方ですね。京橋さんは」

「君の名前は？」

「クウネル」エクスウェル。クウって呼んでください」

「クウは、何でこんなことを？」

クウネルと名乗る少女は、顔を下げてしまった。

「あつ、いや、答えたくなかつたらいいんだ」

「 ない」

「何か落としたのかい？」

クウネルはワンピースの胸元を開け、中を覗いていた。

「違ふんです。“ 聖機師の紋章” が……！」

声を上げ、感情を高めている。

「聖機師の紋章？ 紋章が消えたつてことかい？」

「紋章が消えて……」

その時、クウネルの頭によぎったのは、あつてはならないことだった。

「…… 京橋さん。もしかして、私を救う時、人口呼吸をしましたか？」

「えっ、ああ、あのままだとクウネルが危なかったから」

消えた聖機師の紋章の跡を、クウネルは触れた。

「…… なんてことを」

最も恐れていたことが、現実になってしまった。

「すまないと思つて」

「違ふんです」

もはや、助かる術は一つしかない。

彼に現実を受け入れてもらうこと。

「落ち着いて聞いてください、京橋さん」

真剣な眼差しが、零時の瞳に突き刺さる。

「あなたは、私の契約者となつてしまったのです」

「それはどういふ……」

クウネルは声音を変え、真実味を持たせた。

「私、クウネル」エクスウエルは、あなた達が歌姫と呼ぶ存在。

京橋零時、あなたには私の契約者となってもらい、この第二次神人戦争を戦ってもらいます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7225y/>

交響義戦シンフォニックス・ブレイブ

2011年11月21日16時46分発行